

リサチ

環境と調和した農業⑦

「環境保全米」運動の継続

豊的・社会デザイン研究所代表

葛谷 栄一 氏

地域ぐるみの「環境保全米」への先進的な取り組みでよく知られるのが、宮城県の一部を管内とするJAみやぎ登米だ。管内にはラムサール条約登録湿地でたくさんの渡り鳥で有名な伊豆沼、長沼がある。

環境保全米は、1998年に8JAが合併し、提唱され展開された。当時、生産調整の拡大と米価低迷に苦悩する中、組合員の結集力強化が課題となった。「売れる米作り」を協議する中で、単に消費者や実需者が好む味や品質だけでなく「どんな米作りか」の問いかけに応えられ、かつ地域総参加できる取り組みとして進められてきた。

環境保全米は有機JAS（転換期間含む）、無化学農薬・無化学肥料、そして減化学農薬・減化学肥料の3タイプのメニューを示し、生産・集荷・販売をしている。2011年には販売量に占める環境保全米は90%に達した。しかし、担い手の減少とこれに伴う農地集積・規模拡大から除草剤に頼らざるを得ない農家の増加で、その比率は低下傾向にある。

こうした状況の下、みどり戦略が打ち出された。環境保全米への取り組みが基本であり、それがみどり戦略への対応にも重なるとしている。持続可能な農業経営の展開に向けて目下、取り組みを進めつつあるのが、プラスチック被覆でない肥料による元肥施用、栽培期間中の化学合成窒素投入量の抑制、追肥の省略などだ。また機械除草、アイガモ農法、紙マルチの活用は広がり、アイガモロボットの実証実験も取り組んでいる。

ここで特記しておきたいのが06年からの「田んぼの生きもの調査」の継続実施で、15年には「いきものにきくい企業活動コンテスト」で農林水産大臣賞を受賞。毎年6月第2土曜日に、小学生から肥料・農薬メーカー、卸も含めて140～150人が調査を行う。並行して生物多様性は豊かさを増す。